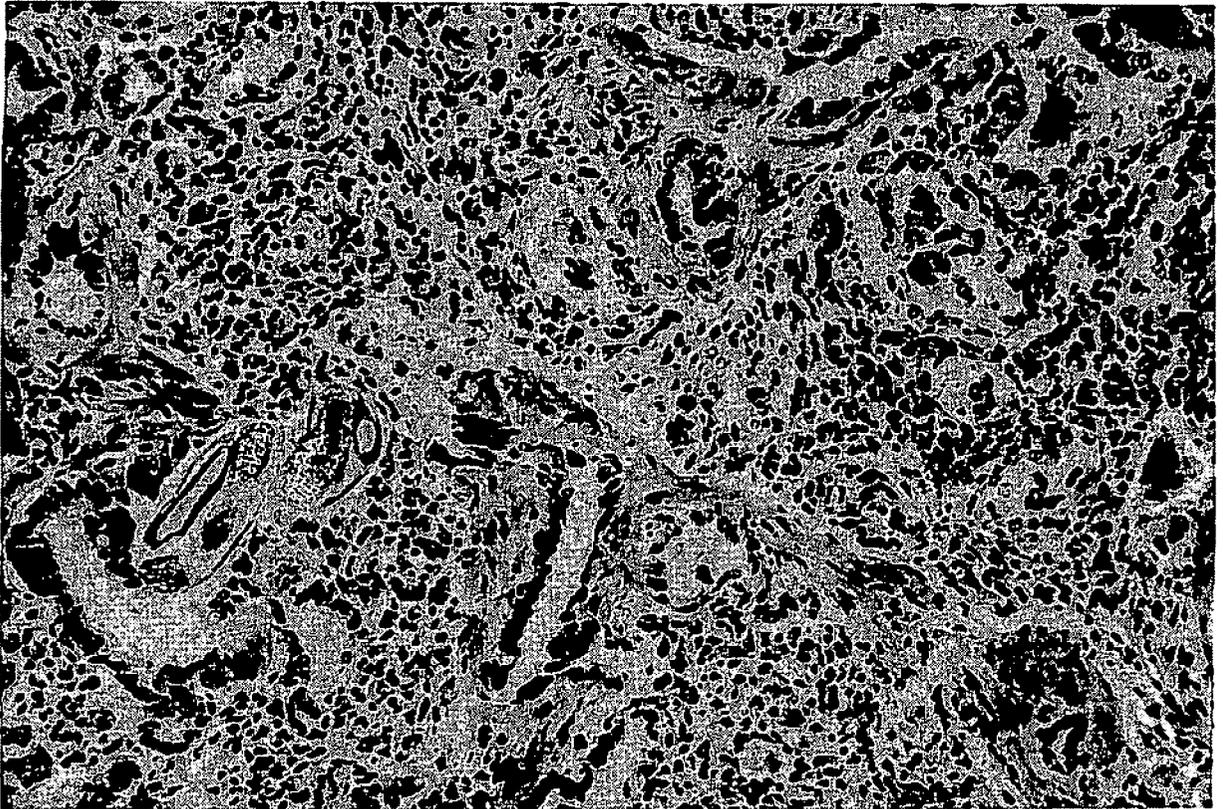


緬羊の寄生性間質性肺炎

酪農学園大学獣医学科出題

第11回獣医病理研修会標本 No.155



本例は採血の目的で滝川道立畜産試験場より払下げを受けた緬羊から得た材料である。払下げを受けてから数ヶ月、余り良好とはいえぬ管理の下で舎飼された。全採血後、学生の健体解剖実習に供され、肺に変状を見たのでこの緬羊の肺のみ材料に供された。同時に払下げを受けた緬羊肺にも同様の所見が見られたが、本例はほぼ肺全域に病変が生じている最も重篤な例であった。高度の削瘦を呈していたが、咳嗽の有無については不明であった。

肺は一見吸気の状に膨満していたが、圧すると軟らかいゴムの様に弾力あり、実質性の感触を有した。わずかに右肺尖葉の一部においてのみ含気性性状を認めた。胸膜は滑沢、緊張し、肥厚は認められなかった。肺は実質性に適度の抵抗があり刀割は容易であった。断面は軽度に膨隆し、肺実質は湿潤、灰白色を呈し血量極めて貧、あたかも増生したリンパ節断面を思わせる性状を示した。気管支は特に拡張を示さず、内腔に黄白色粘稠粘液を中等量ないし多量に容れていた。また、寄生虫は肉眼的に認め得なかった。このように髄様を呈する肺組織の一片を水中に投ずると水面下に浮遊した。

肺門リンパ節は小指頭ないし拇指頭大の結節数個よりなり、断面軽度に膨隆、増生性であった。

肺の大半を占めた髄様感を示した病変部の組織学的所見：前景にたつのは間質の増巾で、それは繊細な線維形

成を伴う結合織増生、リンパ様組織の増生、瀰漫性細胞浸潤及び気管支周囲性の平滑筋の不規則な肥大、増数よりなり、これに対し肺胞は圧迫萎縮を示すか、腫大剝離した上皮を容れ、含気空間は少ない。この様に無気肺性を示す中に呼吸細気管支が目立ち、しかもその上皮は腺腫様増生している。肺胞及び細気管支腔内に寄生虫(毛細肺虫：*Muellerius capillaris*と思われる。また、崩壊好中球、剝離肺胞上皮及び寄生虫体碎片が認められる。間質に浸潤している細胞に好酸球は殆ど認められない。組織破壊を伴う好酸球の小集簇、また結合織に被囊された小結節の単発が認められ、これは明らかに寄生虫の穿孔道である(図、×83)

肺切片の細菌染色は陰性であったが、肺門リンパ節の細菌染色において、リンパ洞内皮細胞内にやや楕円形を呈する小球菌様の暗青色に染まる均一な顆粒を多数認めた。滝川の試験場によると、緬羊の肺炎病巣からは必ずといってよい程 *Pasteurella multocida* が検出されるといふ。

成書によると毛細肺虫による緬羊肺病変は結節性とされている。本例のごとく瀰漫性広範な病変が発現した要因として *Pasteurella* または何らかのウイルス感染の関与も充分考えられよう。

病理組織学的診断：寄生虫性慢性瀰漫性間質性肺炎。